

## ドロステ・ヒュルスホフの特異性

小林保太郎

ドロステの特異性を述べるに当り、叙述の便宜上これを彼女の環境、性格等の特異性と、作品の特異性の二つに分けたいと思ふ。勿論此の二つには確固たる区別はつけ難く、又後者は前者が因となつて生れるものではあるが――

### 一、環境、性格等の特異性

ドロステは、正確に言へば、<sup>(註1)</sup>アナ・エリーザベット――通例アネットと呼ばれてゐる――フオン・ドロステ・ヒュルスホフであつて、一七九七年一月十二日ウエストファーレン州ミンスタ―市附近の古城ヒュルスホフに生れた。

此の女流詩人は生れ乍らにして宿命的なものを身に負はされてゐる。それは彼女が月足らずで生れたといふことである。此のことは終生彼女に大きな影響を与へた。一例を挙げれば一八四七年、即ち亡くなる前の年に親しい友のエリーゼ・リュウデイガーに宛てた手紙の中で次のやうに述べてゐる。

『私はもう殆んど歩くことが出来ません。字を書けば二三行で死ぬ程疲れ、謔書も非常に氣をつけて時たま短い詩か新聞の小記

事が読めるだけです。こんな惨めな有様になりましたのも、もとはと言へば私が月足らずで生れたことにあります。』

又詩集「宗教暦年」の中には『生れ落ちると共に生きるために闘はなければならなかつた。』云々といふ言葉があり、

「月足らずで生れた詩人」と題する詩の中では

『その子に乳母が乳をふくませる迄に

七日の日にちが数へられた。

虫のやうに頼りなげに

砂糖やカミツレに吸ひつき

爪の代りに唯柔い皮膚があるばかり

親指はまるで鳥の蹴爪のやう

見る人は誰でも

「まあ可哀相に

月足らずで生れたんだねえ。」

と言つた』

斯様に記されてゐる。

五十年の生涯の大部分を病床に過ぎなければならなかつた此の

女流詩人は、その原因が遠く自分の月足らずで生れたことにあると信じて居つたやうに思はれる。

備、ドロステの周囲を一瞥してみると、父クレメンス・アウグストは教養の高い温厚な紳士であり、母テレゼは少し気性が勝ち過ぎては居つたが賢夫人で賢母であり、二つ年上の姉ジェニーは絵がうまく又家族内で彼女の詩作の最もよい理解者であつた。(一つ年下の弟ウエルナーと三つ年下の末弟フェルディナントについては別に記すこともない。)

更に彼女の生家が三百年もつづいた貴族の旧家であり、代々敬虔なカトリック教徒であつたことを挙げなければならぬ。

尙母の実家ハックストハウゼン家と、姉の嫁ぎ先ラスベルク男爵家の関係で当時の有名な学者文人、例へばグリム兄弟、詩人ウーラント、哲学者の妹アデーレ・ショペンハウアー等と相識るといふ恵まれた環境にあつたが、ドロステに最も大きな影響を与へたのは、彼女の尊敬する女流詩人で又友人でもあつたカタリーナ・ブッシュの忘れ形身で母亡き後はドロステが実子のやうに面倒を見、遂には別な愛情を感じるに至つたレウイン・シュッキングである。事実ドロステの最も優れた詩はシュッキングとの友情が一番濃やかであつた時に生れたと言はれてゐる位である。

次にドロステ自身の性格に触れてみたい。その特異性は一言にして言へば熱情と冷静、厳しさと優しき、高慢と謙遜の入れまじりである。しかも之等の異分子は渾然と融合し少しも矛盾する処がなかつた。外面的の彼女は静かで優しく控えめであつた。併し内面に蔵された熱情と厳しさはその作品に躍動してゐるのである。

しかし乍ら更にもう一步深く人間としてのドロステを見ると、彼女の性格の根底を為すものは『寂しさ』であり『孤独性』であることがヒシ／＼と感ぜられる。

然らば此の寂しさ、孤独性は何に基くものであらうか？ 外面的には幼児の頃から広い城の中で少い家族や家庭教師、召使などとのみ一しよに暮してきたこと、二十九才の時敬愛する父を失ひ、間もなく愛弟に死別し、ヒュルスホフより更に寂しいリュッシュハウスの隠宅に母、姉と共に引き移つたこと、その姉もやがてラスベルク男爵に嫁してスイスに去り一層寂寥の度を加へたことなどによるものであらう。又彼女の詩才が容易に認められず、二十三才の時書き上げた詩集「宗教暦年」(Das geistliche Jahr)は母の忠告で筐底深く仕舞ひこまれ数十年間日のめを見ずに終り、一八三八年に出版された最初の詩集も一般に不評で家族の者からさへも無視され僅にレウイン・シュッキングやフェルディナント・フライリッヒラートなどの賞讃の辞を得たに過ぎないといふ一連の事実もこれに大きな影響を与へてゐる。

此の性格の故か生涯を通じて自分自身のことについては殆んど語つてゐない。彼女の内面を最もよく伝へてゐる数多い書翰に於ても亦然りである。従つて深刻な悩みも自分一個の胸の中にたゞんで置いて決して他に洩さない。一例を挙げれば彼女が二十三才の時数カ月間真剣に苦しみ後も一生尾を引いたハインリッヒ・シュトラウベとアウグスト・アルンスワルトとの不幸な二重恋愛についても僅に親友のアナ・ハックストハウゼンにあてた唯一通のこれに関する手紙から想像されるのみである。

最近ルトウイッヒ・ベアがドロステの作品、就中「宗教暦年」と二つの未完の草稿レトウイーナ (Ledwina) 及びベルタ (Bertha) から彼女の人間の奥底を見極めやうと試みたが成功しなかつた。或る意味に於て彼女の性格は今尙神秘の謎に包まれてゐると言へよう。

次に彼女の性格に大きな影響を与へたものにキリスト教がある。家が代々敬虔なカトリック教徒であつたことは前述した通りであるが、ドロステの信仰は普通一般の形式的信仰とは全く異なるものであつた。深く内在する罪の意識に夜となく昼となく苦しめられ、その救ひを彼女は神に求めたのである。唯ドロステの信仰は非常に深い反面個人的なものと言はざるを得ない。何故なら彼女の信仰は一言にして言へば良心の信仰だからである。

キリスト教と同様に彼の性格に深い影響を及ぼしてゐるのは生れ故郷のウエストファーレンの風物である。彼女程故郷の土地と精神に深い愛着の絆を以て結ばれてゐたものはない。後年に至つても遙か隔つたスイスのメルスブルクから綿々たる望郷の思ひを詩に託して寄せてゐる。又彼女は故郷の人々の生活をも剩す処なく描写したのであつた。即ちザウアーラント地方の人の商魂、ミュンスタールラント地方の人の素朴で信心深い暮し方、パウダーボルン地方の人の荒々しい気質など——真に故郷はドロステに取つては人生そのものであつた。

処で当時のウエストファーレン地方の特色は生活に於ても信仰に於ても超保守的なことにあつた。ドロステはその古い伝統的慣習を信奉したのである。父祖のよき習慣はドロステに取つて神聖

であり、殊にその信仰は彼女の骨の髄まで滲み透つてゐた。

要するにドロステの性格の特異性は、生涯を貫いて孤独に終始したことであり、又彼女は真のキリスト教徒の一人で、心から故郷を愛した生粋のウエストファーレン人であつたと言へよう。

## 二、作品の特異性

### 1、小説について

ドロステの小説中完成したのは唯一つ『ユダヤ人の櫛』(Juden-buche) があるばかりで他はいづれも未完成に終つてゐる。従つて此の小説についてその特異性を論じてみることにする。

『ユダヤ人の櫛』はよくハインリッヒ・クライストの『ミヒヤエル・コールハース』と比較される。實際両者共事実を何の飾りもなく克明に丹念に書いてゐる点ではよく似通つてゐる。或る文学史には「ドロステは描写の手法をクライストに学んだのだ。」と記してある位である。又深刻なドイツ文学に屢々見られる「暗い免れ得ぬ運命の如何ともし難い世界」を描いてゐる点でも共通である。しかしその主人公の取扱ひ方に至つては大いに異なるものがあるやうに思はれる。即ちクライストが、カントの言ふ「道徳的品性」をコールハースに与へてゐるのに反して、『ユダヤ人の櫛』の主人公フリードリッヒ・メルゲルは、古いカトリック教の伝統に於ける「自然の性質、あるがまゝの気質」をドロステによつて与へられてゐる。従つてコールハースは終始自らの自由な道徳的判断で自分の運命をつくり上げて行く。然るにメルゲルは、その罪を犯すまでは自由意志によつて行つたのであるが、それ以後は

自然の秩序に縛られて行動しなければならぬ。つまりドロステによれば一度或る行為がなされ、これが自然を傷けた以上は当然その酬ひを受けなければならず、従つてユダヤ人を殺して従弟と共に故郷を逃走してゐたメルゲルが、二十八年後に再び故郷に引き戻され、偽つて従弟になりすましてゐたのにも拘らず、自分がその前でユダヤ人を手にかけた櫛の木に縊れて死ぬに至るのである。

十九世紀の文学中ドロステの此の小説ほど悪人の心理を完全に非心理的な方法で見事に描写したものは無いと言はれる。これはドロステが専ら事実、出来事のみを描き、しかも之から精神的推移を察知させるといふ手法を用ひたことによる。

尙此の小説については「メルゲルの心境の変化には余り重きを置かず、強烈で意外な結末の効果を狙つたものだ。」といふ見方もあるが、これは皮相的観察と言はなければならぬ。

又何となく所謂因果応報といふやうな臭ひがするのは、ドロステが余りキリスト教的に感じ過ぎ、常に神の摂理といふことを意識してゐるためであらうと思はれる。

## 2、詩について

ラインホルト・シュナイダーはドロステの詩について次のやうに述べてゐる。

『ドロステの言葉には神から彼女の授かつた信仰がこもつてゐる。即ち神の耳の前で人間に話された歌である。彼女の言葉は祈る言葉だ。』

彼女の詩の全部が斯様な信仰告白であるとは思へない。又自然

の中の悪魔的な不気味なもの、人間の運命と社会の不正に対する彼女の鋭い観察が悉く祈る言葉であるとは言へない。が深い意味では此のシュナイダーの言は正しいと思ふ。何故なら詩に限らずドロステの全作品は神の秩序に対する恐れであり、罪に対する戦慄だからである。結局は神の權威と偉大さに対する崇拜であり、又神が罪を許す恵みを信じ希望してゐることでもある。これをドロステは彼女の詩作の天職を識る以上に一層明確に認めてゐる。これが最もハッキリ現はれてゐるのは彼女の一番洗練された詩集『最後の贈物』(Letzte Gaben)に於てである。これは彼女のわれ／＼に対する「最後の贈物」であるばかりでなく、神の彼女に対する最後の贈物でもあつた。

ドロステの詩は内容から宗教詩、抒情詩、物語詩(及び叙事詩)の三つに分けることが出来よう。(尤も終始深い宗教的使命を自覚して創作に当り最後迄此の態度を変へなかつたドロステの詩は或る意味では大なり小なり悉く宗教詩、少くとも宗教的色彩を帯びたものと言へるのであつて、此の点から言へばこれは純抒情詩とか純物語詩とかいふ風に明確に区別することは困難ではあるが——)従つて此の三つに分けてその特異性を述べることにする。

### イ、宗教詩について

ドロステの宗教詩は、詩集「宗教暦年」二巻および「宗教詩」(Geistliche Lieder)の中に収められてゐるのであるが、どの詩も典型的な宗教詩であつて、人間の魂の悩みと神の恵みの力を知らしめるものである。彼女の宗教的信仰のよく現はれてゐる代表的な詩の一節を引用してみよう。

あなたからわたしを遠ざける

一切に呪ひあれ!

わたしはあなたのもの

ただあなたの子でありたい

ほかのものがわたくしを

救つてくれるくらいなら

いつそ私を永劫に

呪つて下さい

(吹田順助氏訳)

『超世界的なもの、神は彼女に取つては何よりも先に人間の内部、心のうちに存するのであつて、それはあらゆる心情的経験の終局点である』といふメレンブロックの言葉の意味は、此の詩を見ても領けるのである。

尤も『彼女の宗教詩は一個の苦しんでゐる魂の主観的告白と言ふよりは、寧ろ主観的感傷と敬虔な感受性を述べたものと言へよう。』(テオドル・シュタインビューヒェル)といふ見方もあるが、矢張彼女の宗教的疑惑との闘争を述べたものと解釈する方が妥当であらう。何故ならドロステは所謂教會的信者ではなくて、確固たる信仰心を持った近代人であつたからである。

唯前述の「宗教暦年」二巻の中、第一巻は非常に早く書き上げられたのにも拘らず、母の忠告により篋底深く仕舞ひこまれ、二十年後に書き上げられた第二巻と共に、彼女の遺言によつて死後に至り出版されたことはわれ／＼に異様な感を与へる。

ロ、物語詩及び叙事詩について

普通物語詩、叙事詩は抒情詩などに比べては理解しやすい――

ゲーテにしてもシラーにしても――のが通例なのであるが、ドロステの場合に限つて反対である。尤も物語詩、叙事詩に限らず一般にドロステの詩の分り難いといふのは定評であつて、パウ・ナトラートも

『ドロステの詩はいづれも一読よく理解出来るといふ性質のものではない。繰り返し熟讀玩味しなければ真のよい処は掴めない。その代り一度自分のものにすれば二度と放すことの出来ない宝となる。』

と述べてゐる。それにしてもドロステの場合物語詩や叙事詩の方が一層理解し難いといふのは、その特異性の一つに数へることが出来る。物語詩の代表的なものとしては「酬ひ」(Die Vergeltung)を始め十一、二篇のものが挙げられ、又叙事詩には「大いなる聖ベルンハルトの宿坊」(Hospiz auf dem Grosse St. Bernhard) 他三篇の長詩があるが、共通の傾向は前述したやうに「難解」といふことである。

此の難解の理由は第一には彼女の詩の形式が異様であるためだ。尤も物語詩は抒情詩などとは違つて形式はさう八釜しくは言はれないのであるが、それにしてもドロステのは著しく他の詩人のとは異なつてゐる。それは彼女の詩が専ら精神的なものに重きを置き『温い生命』の魂の表現を中心としてゐるからである。そして彼女は心理描写に重きを置く近代性に背馳するやうな表現方法には一顧の価値も置いてゐないのだ。

難解の第二の理由は、その独得な短縮した暗示的表現にある。

そして此の難解といふことは既に彼女と同時代の批評家達が、彼

女の事物を強く表現する方法を見て、気がついてゐたところである。しかし此の暗示的表現を容易に解く鍵を与へられた者は、ドロステの詩の中の難解さは此の天才的女流詩人の優れた芸術的手腕であることが感得出来るのである。彼女の「精神力の世界」を明らかにしやうと試みるものは「世の神秘の解明」といふマラルメの詩に対する定義を思ひ起すことであらう。此の女流作家の詩人としての世界は既に斯の如く新しいのである。

#### ハ、抒情詩について

ドロステの詩の本領は抒情詩にあり、芸術的にも彼女の作品中これが最高峯にあると言へる。

彼女の抒情詩を見て先づ感じられることは、寂しさと孤独感の現はれてゐないものはないといふことである。此の自ら選んだ寂しさと孤独は自然の力に脅かされる。ドロステが鋭い外的感覚と内的観察力を以て認める世界は暗い危険に満ちてゐる。此の暗い危険は、「生」「無常」「死」の権力の中に現はれ、又自然の不可思議の中に、更にこれよりも一層大きな人の心の秘密の中に現はれる。幸福のある処には又必ず脅威がある。孤独のドロステの眼は鋭く澄んでゐる。そして彼女に取つては快くもあれば又恐ろしくもある戦慄の根底を見極めやうとする。

ドロステの詩を読むと黄昏の中にぼうと浮んでゐるやうに、しかもくつきりと彼女の描くものがわれ／＼の眼前に現はれてくる。此の女流詩人が一つ／＼明知するものをわれ／＼は唯感知するだけである。

しかしドロステの抒情詩は特殊のものであつて、宗教的詩と非

宗教的詩が密接に結びついてゐる。彼女の詩は非常につまじやかな人間のなものであり、「物語ること」と「冥想すること」がその特色である。斯様な詩は読む人を魅了しやうとする旋律本位の流麗な詩とは大いに趣を異にしてゐる。そしてドロステの詩の特殊は物語る呼吸の永くつづくこと、無限の縷なす冥想の糸にある。彼女の正確な創造的物語、現実をしつかり把握してゐること、物象の本源を取出してこれを根底まで明らかにしてゐること、言葉の奥底から迸る音楽——かくして読む詩から物語る詩への著しい接近が見られる。これが彼女の詩と同時代の人々の詩と大いに異なる処である。即ちこれは彼女の新しいリアリステイックな物語と観察の形式であつて、ドロステは此の自己の天分を十分に知つてゐた。彼女は自ら

『自然と人生の昔からの不動の価値と、愛の確固たる力を伝へ、魂に神の焰を吹きこむために「時代」に呼ばれたのだ。』

と明言してゐる。彼女の詩の一部分に時代を呼びさます特長のあるのはこのことからハッキリ分る。詩人としての彼女の自覚は眼を「生きた魂」に向けさせた。そして生きた魂から生きた魂へと次々に呼びかけたのである。

彼女の総ての詩に心を掴むもの、心を呼びさしますものを与へてゐる神秘的な力の基は此処にある。故にドロステの詩のめざす処は単に人間の鋭敏な感覚力、感ずる魂にのみあるのではない。寧ろ神の息吹きのみだ消えてゐない魂であり、自分の魂の秘められた生命を再び呼び起し、それが炎となつて自分の身を包ませるに至る力を持つた人間である。

即ちドロステの詩は、人生の真、存在の實を明らかにし、これを述べやうとしてゐる。一切の幻想、偽りの理想主義、美しいだけの浪漫主義は眞実を求める彼女とは相容れない。眞実を求めることが彼女の作品の根本的特質であり、又その作品を生む彼女自身の特質でもある。

彼女の 観察眼の鋭さは既に「荒野の景色」(Heidebilder)といふ詩の中で、今迄何人も観察したり叙述したりし得なかつたことを記してゐる。彼女は自然を愛してゐたのでその奥底までよく知つてゐた。更に彼女は自然の深さの中に不気味なものや怪奇なものを見てゐるが、これは唯キリスト教徒としての彼女の眼にのみ映ずるものである。

また彼女の鋭い眼と耳とは常に生物の不安を感知する。これを如実に記したのが詩「呻く生物」(Die ächzende Kreatur)である。

ドロステはアーダルベルト・シュティフターのやうに「自然のやさしい掟」を見ずにその「きびしい掟」を見た。彼女は自然の中の苦痛を見、残酷さを感じる。即ち『無意識に網を周囲に張りめぐらす』食虫植物を見、『石の上を追ひかけられてゐるやうにおどく走り廻り、忽ち苔の中に頭を埋めてしまふ』虫を観察する。ドロステはシュティフターが黙つてゐたことを見、そして語つた。即ち彼女は自然の恐ろしいもの、混沌としてゐるもの、底知れず奥深いものを語つたのであるが、しかし彼女の見る自然の眞の奥底には神の定めた秩序の神聖な静けさがある。ロマンティックな陶酔的な人生の喜びは彼女のキリスト教的信仰とは相容れ

ない。同時にこれはシュティフターの温和な自然の調和とも相反するものである。しかし自然の大きな秩序を認めてゐる点ではドロステもシュティフターと同じである。唯彼女の見るのはキリスト教的に言へば「妨げられた秩序」である。これは人間が神に対して罪を犯してゐる故に、神のつくつた完全な秩序を乱したものに他ならない。従つて神の呪ひを受けることになる。此の神の呪ひは人間に対してのみかけられるものではなく総ての生物にかけられてゐる。人間は、「自然」に悩みと苦痛をもたらす、その人間を又自然が苦しめる。病身の女流詩人はこれを痛切に感じてゐた。人間は苦痛を知つてゐる生物であり、此の苦痛が自然の深奥に達する道を人間に与へるものである。

しかしドロステの人生観、世界観はレーナウの哲学的浪漫的厭世主義とも違ふ。何故なら彼女は深くキリスト教的に最後の神の救済を信じてゐたからである。

人生は彼女に取つては夢ではなかつた。きびしい現実であり、危険に満ちて居り、危難にさらされてゐた。

ドロステは又夜の闇と死の国の深遠な暗さに惹きつけられた。そしてノヴァーリスと同様に夜に身をひたしたのであるが、彼は違つてドロステは唯自分が身をひたすばかりでなく、夜の中から不安におののく生物の神に対する祈りと叫びの声を聞いたのである。

下へではなく上へ上へ——これが自然と人生の暗い深淵を通つてドロステの辿る道である。

自然と同様にドロステのバックをなしてゐるものは人間であ

る。自然は深淵であり、自然に於ける人間は無気味な深淵である。これがドロステのリアリズムだ。此のリアリズムはノヴァーリスの不思議な理想主義や、ブレンターノの童話の世界や、後のE・T・A・ホフマンの自然を神秘的に考へる浪漫主義とは大いに異なるものである。と言つてもメーリケに於けるやうに素朴なものではなく、またシュティフターに於けるやうに調和的古典形式のリアリズムでもない。強ひて言へば信仰的リアリズムとでも言ふべきであらう。何故ならドロステはそのカトリック的信仰から自然を神の創造と見、これをその根源たる神、創造主に結びつけてゐるからである。彼女は神の概念を汎神論的に和らげることを知らず、従つて自然の厳しさを弱める「存在するものの融合」といふことを知らない。故に彼女は存在するものを信仰の眼であるがまゝに見る。そして自然の真唯中に罪、苦痛、征服し得ぬ恐ろしいもの、本質的に悪魔的なものを見るのである。彼女は之等の無気味なものをその信仰の灯で隈なく照し、これを神の秩序の中に取入れた。これはノヴァーリスもテイクもホフマンも出来なかつたところで、ドロステのみが為し得たのである。

どんな小さなものでも見極めてその中に潜んでゐる特質を適切な言葉で表現するといふ能力以上に、ドロステには超人的な耳聰さがあつた。彼女は周囲の事物を目で見えて知る以上に遙に正確に耳で捕へたのである。普通の耳では聞くことの出来ないやうな物音でも聞き取り、その音の印象を細分して豊かな言葉で之等を適切に表現してゐる。

フライリッヒライターも言つてゐるやうにドロステの詩の強く打

出される韻、力強い音の転向には、外来語を巧みに駆使してゐることが与つて大いに力がある。彼女は、時には雷の如く轟き時にはひそかに囁くやうな言葉の音楽に、分り易い代りに無味乾燥で音の変化も面白味もない日常語を混ぜあはせ、斯くして微妙な感覚でのみ知り得る純精神的な世界を民衆の使ひ古した言葉と結びつけ、彼女の民衆的な素材を生かしてゐるのである。

ドイツ文学の詩の中で真面目さと真実さに於てドロステの作品に匹敵するものは数少いと言はれる。(因襲的時代調から脱却し切れないものや情緒的田園詩は別である。)

われ／＼には彼女の詩が胸中に黙止し得ずして迸り出たものであることがよく分る。その中には唯一つの過まつた響もないし、唯一つの空々しい気配さへ感じられない。そこには幾分先覚者の言が見られ、同時に高度の近代性の響が聞かれる。これは——ヘルダーリンを除いて——十九世紀前半に世に出た抒情詩中その比を見ない進歩的なものである。

従つて彼女の詩の真実のよさは中々理解し難いのであるが、情緒的な田園詩など何人にもその美しさがよく分る。即ち陽に照されたウェストファーレンの荒野や、冥想の詩による自然の表現、生活環境の非感傷的描写のしつかりした手法は、それだけで価値あるものであり、自然から離れ遠ざかつた現代人の疲れた神経を爽快にしてくれる神の与へた栄養とも言へるからである。そして此の場合もドロステは彼女が自然から詩人の耳で聴き取つたものを芸術的に見事に描き出してゐる。最も純粹な精神的なものと融合してゐる此の女流作家は、その精神的なものを悉く見事に



具体化し、生命あるものに変ずることが出来たのである。

又之等の詩は如何にも女性的に綿密な心くばりの下につくられてゐる場合が多い。しかも一方では現実を力強く把握して居り、又女性独得の力が之に与つて力があるやうに思はれる。斯ういふ点に於て此の女流詩人は比類が無い存在と言へよう。彼女は明らかに時と処を超越して不滅の詩人の一人である。

ドロステはその作品から時に所謂(註3)ビーダーマイヤー派の詩人に数へられ、時にはその代表者とさへされてゐることがあるが、これは大きな誤と言はねばならぬ。何故なら此の派の詩人の市民的狭さ、わざとらしさ、冷やかさ、啓蒙思想の缺如は彼女の世界ではなかつたからである。

### 三、結 語

死後既に百年以上経つた今日尙ドロステに関する文献や全集が相当出版されてゐる事實は、彼女のドイツ文学に置ける不動の地位を立証するものである。仮令その読者層は必らずしも大ではなといへ、現在ドロステの作品が競まれ論じられてゐる理由は第一にそれが真面目さに満ち真実に溢れてゐるからである。彼女の作品は悉く心の奥底から湧き出たものであり、已むに已まれずして生れ出たものである。それが時と処を超越してわれ／＼の心に強く響くのだ。

又彼女は常に深い宗教的使命感と天職といふ意識を以て創作に当り、最後まで此の態度を変へなかつた。これが今日尙彼女がわれ／＼と共に生きてゐる第二の理由である。

聊か尻切れ蜻蛉の観があるが、規定の紙数が尽きたのと、ドロステについては更に研究を進め機会を見て又書きたいと思ふので一先づ此処で筆を擱くことにする。

註1 Anna Elisabeth (Annette) von Droste-Hülshoff.

註2 一月十日又は一月十四日に生れたという異説もあるが各種の文献を見て十二日が正しいと思はれる。

註3 ビーダーマイヤー文学は傳統としての古典派、浪漫派と新興のリアリズムとの中間にある一種の文学形態である

が、此の派の詩人の自然に対する態度を要約すると、(a) 小さなものへの愛 (b) 蒐集と保護 (c) 一種の印象主義 (d) 事物の凝観、本質的編照といふことになる。(吹田順助氏)

— 本学教授 —

### 文 献

1. Theodor Steinbichel: Annette von Droste-Hülshoff nach hundert Jahren.
2. Oskar Walzel: Deutsche Literaturgeschichte seit Goethes Tod.
3. Clemens Haselhaus: Leben und Werke.
4. Schulte Kemminghausen: Annette von Droste-Hülshoff.
5. Paul Nathrath: Über Droste-Hülshoff.